

人、それを快拳と呼ぶ

江尻のネームバリューが、高2 2回卒業で野球部OBの釜石君と及川君に知り合うきっかけを作ってくれた。同窓同級でも全く初対面の輩である。

まず、釜石君、ひたむきな生真面目さと洒脱さをあわせ持つ気配りの人。かつて辞令一本で南米の大国へ赴任したと聞くが、洗練された都会の住人である。

片や及川君は経営者だそう。開口一番、「江尻を頼む」と抜き身の一升瓶を差し出してくれたものだ。正直、一流銘柄に救われる思いで、率直な人柄を受け入れた。

今更にして思う。この両君が鉄壁の二遊間を誇っていたのだ。否、まだ忘れて欲しくないキャラがいる。己の頑固さを物静かな拳措でまぶし、チームを無言で叱咤していた男、江尻の師匠筋に当たる投手兼一塁手の横田君（元仙台二高硬式野球部監督）だ。三者三様、ごった煮の中で互いの色を失わずにたぎっていた野菜の如きを想像してしまった。鍋を煮立たせていたものは、定期戦かはたまた甲子園か。何も考えずに、自分の個性を垂れ流せた時代が懐かしい。

さて、江尻。我々二高同胞のノスタルジーを喚起してくれた。5月14日、時あたかも二高・一高野球定期戦の初日である。セパ交流戦・対横浜2回戦のマウンド。江尻の体内時計は、既に完封に向けての時を刻み始めていた。

4回まで横浜のヒットは、3番金城のショート内野安打一本だけ。見ごたえは、4番佐伯を二打席連続で空振りの三振に仕留めたフォークボールの冴えだ。

5回表、この回先頭の5番多村を打席に迎える。2 & 1と追い込んで外角に配したフォークボールを多村が見た。振らせにいったワンバウンドではない。決めに行った一球をだ。カウント2 & 2。「多村は外角狙いですよ。そして、江尻の勝負球も外角です」と言い切ったのは、解説の福間納（元阪神投手）。ボールと分かるストレートが内角高目に外れる。2 & 3。更に、外角低目のストレートとカットボールを二球続けて多村がカット。解説福間の読み通り、江尻は執拗な外角攻めに拘った。そして、時が満ちた。外角へフォークを投げさせた多村、それを知って投げた江尻、左中間の二塁打は結果に過ぎない。この5回。ノーアウトで2塁にランナーを許した後は、3人の打者を凡打と三振に押し伏せた。

四球のランナーを出した7回・8回は内野ゴロ併殺で切り抜ける。いずれも野手の正面を突く幸運な当たり。何よりダブルプレーが球足の強い打球を証明していた。多分にツキと見る向きもあろう。しかし、悲願達成に愚直なまでに時を刻む体内時計を、江尻本人でさえも止めることは出来なかったのだ。

気が付けば、完投と完封の二兎を得る……。4勝目は集中力の賜物だった。

シャットアウトまでのカウントダウン、それはまさに勝利の感触として江尻の魂に宿っていよう。しかし、手応えはいつも不確か。時として悪魔の囁きに変わるものだ。勝利に向う秒針は君の自信で起動させよ！！いざ、巨人戦のマウンドだ。次回登板は5月20日が濃厚。